

百 濟 先 生 を 偲 ぶ

能 田 忠 亮*



百濟博士遺影（昨年9月4日撮影）

昭和 39 年 12 月 8 日、日頃尊敬していた百濟教猷先生は、肝硬変と肝臓腫瘍のため、兵庫県仁川のお宅で永眠された。行年 70 才。誠に哀惜の情に堪えない。

先生は天王寺中学、三高を経て東大理工科大学星学科を卒業され、天体暦作成については、夙に命名高かった。東京天文台技師を辞任後、昭和 4~5 年の頃、京大理学部助教授として出講された。当時、私は東方文化学院の研究員であったが、学生と共に先生の天体力学と軌道論を聴講して、その学殖の豊かなこと、理論の整然たるに深い感銘を覚えたものであった。

その後 10 年を経て昭和 15 年 4 月に、今の京大人文科学研究所の前身東方文化研究所に、東洋曆術調査事業が設置され、天文曆算研究室主任だった私は東京京都の各専門研究家に参加を請うてスタートした。大阪からは百濟先生に出馬を願い、編曆法、食論、天体曆作成法の講義を担当して戴いた。先生の講義は明快で而も懇切鄭重、その内容は具体的で先生の創意に基く所が随所に見受けられ、実に素晴らしいものであった。引き続いて昭和 19 年海軍水路部から私は天文業務作業の主務担当を依嘱され、先生は太陰の位置計算の準備に着手され、その計算も愈々緒に就こうとした時、終戦を迎え、水路部京都分室は解散の止むなきに到った。その間私たちは、度々の空襲警報におびえ乍らも技工士 9 人等とともに毎日先生に接して楽しく天文業務に従事したが、翌年 3 月の大空襲で、大阪市東区にあった聞信院（先生が院主であった寺）は烏有に帰した。その時、万卷にも近い天文書、殊に先生自ら苦心の書き込みがしてあった *Astronomical Papers on American Ephemeris* や研究資料は尽く灰燼に化してしまったのを、目のあたり見た時は、私どもでさえ呆然自失するほどであったので、ましてや先生の悲嘆は如何ばかりであったであろうか。ただ東方文

化研究室に持ちこまれてあったものだけが僅に戦災をまぬかれたのである。それとは別に先生の編曆法・食論・天体曆作成の三編 15 章 184 節にわたる講義を筆記しておいたノートが 10 冊ばかり残った。

戦後昭和 22~23 年頃、先生は西宮市仁川の松林の中に小さな住居を建て、老いた姉上とそのお嬢さんと 3 人で住まって居られたが、私は昭和 24 年 8 月から大阪学芸大学に勤務するようになり、三分校を駆け廻って多忙だった故もあり、心ならずも御無沙汰に打過ぎていた。34 年山本一清先生の告別式で久しぶりに百濟先生にお目にかかり、非常に懐しかったが一寸御挨拶しただけでお別れした。その頃先生は神戸商船大学で天文学の講師をしておられたが、山本先生の後を受けて東亜天文学会の会長となられた。

昨年 11 月 7 日のことである。突然電気科学館の佐伯恒夫君から、去る 9 月 15 日百濟先生の姉さんが 84 才でお亡くなりになり、その看病疲れやお氣落ちで先生の健康が勝れず、目下静養中であることを聞かされた。それで 11 月 15 日、嘗て先生の講義を聴いた清永嘉一君とともに、初めて仁川のお宅を訪ねて御無沙汰のお詫びやお悔み、先生の病氣見舞やらを申し述べたのであった。先生は大変喜ばれ案外元氣良く天文の話などをされた。先生は天文の外には機関車の模型づくりが大変好きだったが、それも今は手につかず、専ら養生に努めておられる様子にやや安心して近い再会を約し、今度見えたらいよいよお寿しでもとって共に夕食を楽しみたいといわれ、わざわざ門外まで服装を直して見送りに出られ名残りを惜まれたが、これが永遠のお別れになろうとは全く思うてもみなかった。それほどお元気に思えたのに、その後 1 カ月もたたぬ間に先生は世を去られた。せめて今暫く御存命であったなら、度々伺って寂しい御病床をお慰めできたであろうにと残念でならない。

先生は終生娶らず、狷介にして名利に恬淡、余りにも報いられること少なく世を去られたが、易簣の日、先生は、お顔にかすかな笑をたたえ、胸には姪御加寿子さんの手になる仲良し 3 人組（先生・姉上・姪御）のマークの人形をつけて、まことにおだやかな最後に見受けられたのは、私にとってもせめての安らぎであった。先生の一生は肉親の縁薄く、あれほどの秀れた学才も世間には聞えず、孤独に近い感じもないではないが、また一方、自由と清純の幸福な晩年であったともいえるだろう。

* 大阪学芸大